

生成を語る—精神分析と哲学

原 和之（東京大学）

人間存在をその生成という側面から問題にするということは、それを静的に論じる場合とは異なった前提を設定するということを含意する。20世紀の初めにアレクサンドル・コジェーヴがヘーゲルの『精神現象学』について行った読解には、まさにそうした契機が認められるが、ジャック・ラカンがコジェーヴの議論を参照しつつも、精神分析に固有の文脈から異なった仕方での前提の再設定を行った。「欲望の弁証法」の名で知られるその議論は、精神分析が展開してきた人間的な生成の考察、「歴史」ならぬ「リビドー発達史」をめぐる考察の蓄積を統一的な観点から読み直そうとするものだが、その際ラカンが他者の欲望をめぐる異なった前提を引き受けたことは、精神分析と哲学の間に一つの空隙を、ただしそこで実り豊かな議論の展開しうるような一種の遊動空間を開いたように思われる。ここではそうした議論の例として、ブラジルの哲学者ウラジミール・サファトルの近著『情動の回路（Le circuit des affects）』（2022）の議論を紹介しつつ、生成を語るという課題に取り組む二つの分野の関係のあり方について検討する。